

生物多様性の保全



マテリアリティの中長期ビジョンと2021年度実績

	リスク	機会	対応の方向性
長期	<ul style="list-style-type: none"> ●生態系の損失に起因した環境変化による資源の調達不安定化および調達コストの増加 ●事業での土地利用に起因した生態系の損失による企業イメージ低下 	<ul style="list-style-type: none"> ●資源の調達不安定化および調達コスト増加の回避 ●事業での土地利用に起因した生態系への影響の緩和・回復による企業イメージ低下の回避 	<ul style="list-style-type: none"> ●気候変動・資源採掘・環境汚染が生態系に及ぼす影響（種の絶滅や生息・生育域の移動、減少、消滅など）を踏まえ、これらの問題に取り組むことで、生態系損失の低減にも寄与していく ●地域の生物多様性と調和した保全施策の実施

	外部環境	ステークホルダーのニーズや期待	中期目標
中期	<ul style="list-style-type: none"> ●IPBES (※1) により、2019年5月に公表された評価報告書にともなう国際的な保全強化 ●2022年に開催予定の生物多様性条約第15回締約国会議における「ポスト2020生物多様性枠組み」の採択に向けた検討 	<ul style="list-style-type: none"> ●環境配慮要請の高まり ●ESG投資の拡大（投資家による企業活動の転換促進） 	<ul style="list-style-type: none"> ●気候変動対策・資源循環・環境汚染防止への取り組みの推進 ●地域に根ざした環境課題への取り組みの推進

項目	2021年度目標・実績	自己評価
国内拠点の生態系調査を生かした保全活動の推進	国内拠点での在来生物の育成・保護： 京都工場でのピオトープ (※2) の維持管理および希少水生植物の育成 滋賀工場での湿地保全および希少植物サギソウの育成 国内外での植林・育林活動の実施： バジェロの森 (山梨県) での植林・育林活動の実施 タイでの植林プロジェクト実施	○

○：計画通り △：遅れあり

※1：IPBES：生物多様性および生態系サービスに関する政府間科学政策プラットフォーム

※2：ピオトープ：生物が自然な状態で生息している空間



基本的な考え方

すべての生きものは様々な関係で複雑につながり合い、バランスを取りながら生きています。私たち人類の生活は、この生物多様性による恩恵を受けています。

三菱自動車は、工場建設をはじめとする土地利用や、工場からの化学物質の排出、製品の使用や事業活動によって排出される温室効果ガスなどにより、生物多様性に直接的または間接的に影響を与えています。また、気候変動による地球環境の変化は、生態系に直接的かつ大きな影響を及ぼすとされています。当社は人類が生物多様性による恩恵を持続的に受けられるよう、気候変動対策をはじめとする取り組みを推進し、生態系を守っていくことが、当社の重要な課題と考えています。

当社は、2010年8月に「三菱自動車グループ生物多様性保全基本方針」を策定し、保全活動を推進しています。

当社の国内事業所で、自然環境保全法および都道府県条例にもとづく保護地域の内部や隣接地域にあるものはありませんが、事業活動が生物多様性に与える影響を把握するため、生態系調査を行いました。

また、首都圏の水源を守るとともに社員の環境意識を醸成することを目的に、公益財団法人オイスカと協働し、山梨県早川町において、森林保全や社員ボランティア活動を通じた地域との交流に取り組んでいます。

さらに、海外の関係会社でも保全活動を推進しています。

三菱自動車グループ 生物多様性保全基本方針

人類の活動が生物多様性の恩恵を受けているとともに、生物多様性に影響を及ぼしているとの認識を持ち、三菱自動車グループ企業全体で、地球温暖化防止、環境汚染防止、リサイクル・省資源の取り組みに加え、生物多様性に配慮した活動に取り組み、生物多様性への影響の把握と低減に継続的に努めます。

1. 事業活動での配慮

省エネルギー、廃棄物の発生抑制、化学物質排出抑制などを推進するとともに、工場建設などの土地利用においては周辺地域に配慮し生物多様性への影響の把握と低減に努めます。

2. 製品での配慮

燃費改善、排出ガス対策、リサイクル設計を推進し、環境に配慮した材料の採用に努めます。

3. 理解・啓発・自覚の継続

三菱自動車の活動と生物多様性の関係についての理解と自覚を、経営層から従業員まで全員で共有します。

4. 社会との協働・連携

サプライチェーンおよび株主、自治体、地域社会、NPO/NGOなどのステークホルダーと連携し、活動を推進します。

5. 情報の発信・公表

三菱自動車の活動内容や成果について、お客様や地域社会への情報発信・公表に努めます。

国内拠点の生態系調査を生かした 保全活動の推進

国内事業所における生態系調査

自動車の生産には大規模な工場を必要とします。当社の事業における土地利用が地域の生態系に与える影響を把握することは、生物多様性保全に取り組むうえで重要と考えます。この考えのもと、当社は生物多様性関連のコンサルティング会社の支援を受け、工場など大規模な土地を利用する国内事業所での生態系調査を実施しました。調査では、国内事業所の敷地内のみならず、周辺環境の生態系を実地調査や文献調査から把握することで、地域の生物多様性と調和した保全施策につなげています。

生態系調査 実施拠点

実施年度	拠点
2013	京都製作所 滋賀工場
2015	岡崎製作所
2017	水島製作所／京都製作所 滋賀工場(※)
2018	十勝研究所
2019	京都製作所 京都工場
2021	京都製作所 京都工場(※)

※：施策による保全効果を確認するためモニタリング調査を実施

京都製作所 京都工場 地域と連携した希少植物の育成

京都工場はかつて地域に見られた植物や昆虫が局所的に生き残っている場所（レフュージア）になっており、地域の生物多様性を保全するうえで重要な環境であることが生態系調査の結果からわかりました。そこで、トンボなどの昆虫が生息しやすい環境を整えるため、構内の緑地「憩いの広場」にビオトープをつくり、広場にある池で希少水生植物のオニバスやミズアオイなどを育成しています。池は水流がほとんど無いため、定期的には人の手を加え水質を保つ必要があります。2022年3月、池の生態系を守るため、社員が参加し、池の水を抜いて清掃する「かいぼり」を実施しました。

さらに、かいぼりに合わせて、生物モニタリング調査を行ったところ、新たな種として「コカゲロウ科（カゲロウの仲間）」と「クロスジギンヤンマ（トンボの一種）」が確認されました。これらの種は、ビオトープに水生植物を植栽した結果、池を利用するようになった可能性があると考えています。



憩いの広場の池



かいぼりをする社員



コカゲロウ科の幼虫



クロスジギンヤンマの幼虫

希少水生植物の苗は、京都市南部クリーンセンター内の環境学習施設「さすてな京都」から株分けされたものです。池で順調に生育したミズアオイの種子を採取し、2021年11月に、その一部を「さすてな京都」に里帰りさせました。里帰りした種子は、「さすてな京都」から希少水生植物の育成・繁殖に協力する京都市内の企業や学校などへ提供される予定です。



ミズアオイ(左)と採取した種子(右)

京都製作所 滋賀工場 サギソウが咲く湿地の保全

工場内にある湿地の保全を通じて、希少植物であるサギソウの保護に努めています。メリケンカルカヤなどの外来草本を社員が定期的に駆除し、湿地の環境を維持することにより、毎年夏にサギソウが清楚な花を咲かせます。



社員による外来草本の駆除



サギソウの開花

海外における保全活動

三菱・モーターズ(タイランド)・カンパニー・リミテッド(MMTh)と非営利団体(NPO)「三菱・モーターズ・タイランド・ファンデーション(MMTF)」は、タイ王室森林局およびタイ国家温室効果ガス管理機構と共同で森林の再生活動『MMTh60周年記念60ライ森林再生プロジェクト』を行っています。2021年度は東部チョンブリ県とサケーオ県にある森林60ライ(約9.6ヘクタール)の森林エリアに12,000本の植林を行いました。2022年度は、ナコーンラーチャーシーマー県で40ライ(6.4ヘクタール)に植林します。今後もMMTh社員と地域社会が一体となって森林の再生活動を行い、地域の環境保全に対する意識の醸成に努めます。



タイでの植林の様子(チョンブリ県)